アヌココㅁ アイヌ イコロマケンル ソンコ

アヌアヌ

国立アイヌ民族博物館ニュースレター

NATIONAL AINU MUSEUM
ANUANU
018
2024.12

ミュージアムAct-ion!
基本展示室のこの展示を見て!!
調査研究最前線⑪
博物館Pickup!
見て見て! 園内サイン⑥
国立アイヌ民族博物館からのお知らせ
ウポポイってこんなとこ⑮

［第7回テーマ展示］ 収蔵資料展

収蔵庫内の様子

アイヌ文化に関する約1万点の当館収蔵資料。その収集や保管など博物館の「裏側」のしごとについてご紹介します。

詳しくは2ページへ!

活用

さわる

さわる

複製を手にとる展示を通じて資料形状の雰囲気を体感します。

イコロ(宝刀)の模型

収集

さがす、あずかる、みせる

当館では収蔵資料を文化財として捉えています。アイヌ民族に関するさまざまな資料を買取、寄贈、寄託の各方法で収集し、展示や調査研究などで利用できるようにしています。

さがす

さまざまなアイヌ民族関連の資料を収集し、公開できるよう整理します。

あずかる

文化財として、後世へ伝えるために資料の保管と展示等への活用を行います。

みせる

見どころとなる資料を公開します。

収集したイタ(盆)／当館蔵

アペフチカムイ
(作:貝澤徹)
／当館蔵

国立アイヌ民族博物館

収蔵

会期 2024.12.1

休館日／毎週月曜日 ※月曜日が ※年末年始

会場 国立アイヌ民族博物館

国立アイヌ民族博物館は、「先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外のアイヌの歴史・文化に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造および発展に寄与する」という理念のもと、アイヌ文化関連の資料を調査しています。
当館は約1万点のアイヌ文化に関する資料を収蔵しています。アイヌ民族文化財団資料(寄贈資料含む)、保管委託資料(文化庁購入資料)、

資料整理(記録撮影)の様子

関連イベント Event

学芸員なりきり体験

展示室でお話をきいてみよう

【第1回】12/14(土) 14:00−14:30
【第2回】12/21(土) 14:00−14:30
【第3回】 2/ 1(土) 14:00−14:30

タマサイ（首飾）の模型

模型の部分拡大
（上：タマサイ、下：シトキ）

第7回テーマ展示

資料展

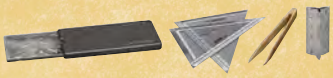
ルウンペ（木綿衣）／当館蔵

4 SAT → 2025.2.16 SUN

祝日または休日の場合は翌日以降の平日が休館日になります
の6日間（12/29㈰～1/3㈮）は休館　※1/13㈪・祝、2/10㈪、2/11㈫・祝は開館。1/14㈫は休館

2階 特別展示室　【主催】国立アイヌ民族博物館【後援】公益社団法人北海道アイヌ協会

寄託資料で構成され、資料を収集すると共に、これらを後世へ伝えるための保管に関する活動も行っています。
本展覧会では、当館収蔵資料や複製を手にとる展示を通じて、収集や保管など博物館の「裏側」のしごとを紹介する企画としました。関連イベントと合わせ、アイヌ文化に関する資料を次世代につなぐ取り組みをご覧ください。



資料調書をかいてみよう

【実施日】1/11㈯ 14:00－15:00 ※事前申込制

博物館の裏側をみてみよう

【第1回】1/18㈯ 14:00－15:20 ※事前申込制
【第2回】2/15㈯ 14:00－15:20 ※事前申込制

詳しくは当館ウェブサイトをご確認ください。

保管　まもる、みる、つたえる

収蔵資料は植物素材で構成された資料も多く、温湿度や害虫などの保管環境の影響を受けやすい性質があります。今の姿のまま資料を後世に伝えるため、保管に関するさまざまな工夫をしています。

まもる

安全な資料の保管のため、劣化要因を制御し安定した空間を作ります。

みる

科学分析で資料の状態を診断し、目には見えない損傷の予防や備えをします。

つたえる

調査研究や展示などで活用できるよう、資料の状態改善に努めます。

収蔵庫内の様子

X線CTの撮影直前の様子

中性紙製の収納箱に納めたイクバスイ／当館蔵

ミュージアムAction!

国立アイヌ民族博物館では、
アイヌの歴史・文化を正しく理解していただくためにさまざまな教育普及活動を行っています。
今号は当館の展示企画室の仕事について紹介します。

博物館の展示企画室では どのような仕事をするのでしょうか

展示企画室は、国立アイヌ民族博物館の展示に関するすべての業務を統括する部署です。主な業務として、展示の予算執行管理や外部委員を招いて展示内容について検討する会議の実施への対応を行っています。基本展示や特別展示、テーマ展示の企画から管理・運営、改善に至るまで、展示に関する全体的な方針策定と実施や、年に6回の基本展示の入れ替え、年4回の特別展・テーマ展示も担当しています。展示に使用する備品の調達や展示ケースの維持管理など、展示の質を高めるための管理業務も行います。

新しい展示の準備

資材搬入の様子

展示担当の仕事は、多岐にわたる業務を通じて博物館の展示内容を充実させることを目的としています。展示の企画から設計、実装、改善までを包括的に担当し、来館者が展示物を見て学びや感動を得られるように工夫しています。展示内容をより理解しやすくするために、解説やパンフレットの作成、グラフィックの制作にも取り組んでいます。さらに、展示内容の多言語対応にも力を入れており、アイヌ語をはじめとする多言語での展示解説を実施し、多様な来館者にとって理解しやすい展示を提供することを目指しています。

映像作品の多言語音声制作

特別展示やテーマ展示の企画、管理、運営のほか、展示映像機器の管理、映像の企画制作、外部委員を招いての映像について検討する会議への対応なども担当しています。バーチャル博物館の情報更新や新たな企画立案、シアタープログラムの企画・制作も手がけています。音声ガイド機や携帯アプリを通じたコンテンツ配信・更新、ホームページコンテンツの更新などを行い、来館者が充実した体験を得られるようサポートしています。

導入展示の映像の調整

展示企画室は、こうした幅広い業務を通じて、アイヌ文化を紹介し、博物館展示が持つ文化的役割と情報提供の質を向上させるために日々取り組んでいます。

基本展示室の この展示を見て!!

サケにまつわる資料を探してみよう！

当館の基本展示室は、見る人の関心にそって自由に回ることができます。
今回は、「サケ」をキーワードに資料を紹介します。
（アソシエイトフェロー　田村実咲）

アイヌ文化のなかで、サケはどんな存在？

サケは、秋になると川を上ってくる重要な食料の一つです。干して保存食にするほか、さまざまな料理に使います。サケの皮からは、衣服や靴を作ることができます。たくさんのサケが川を上ってくる様子は、“下行く魚の群れは底石にすれ、上行く魚の群れは日光に焦げる”と謡われるほどです。

どんな資料があるの？

サケを捕る

サケ漁は川で行いました。マレㇰ（突鉤）を使って、鉤先にサケを引っかけて捕ります。川から上げたサケは、イサパキㇰニ（魚をたたく棒）という、削り掛けのついた棒で頭をたたいて仕留め、魂をカムイの国へ送りました。

【プラザ】マレㇰ（突鉤）

【プラザ】イサパキㇰニ/イパキㇰニ（魚をたたく棒）

【探究展示 テンパテンパ】マレㇰ

体験してみよう！

【プラザ】開拓使によるサケ漁の禁止（北海道立文書館蔵 複製）

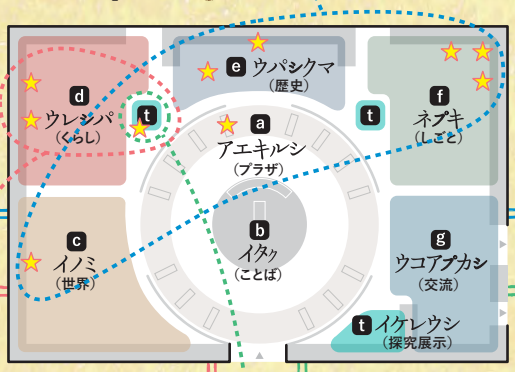
江戸時代までは干しザケは主要な食料と交易品の一つでしたが、明治時代に入ると、河川でのサケ漁は法規制がされるようになりました。
現在では、アシリチェプノミ（初サケを迎える儀礼）などの伝統文化の復興が道内各地で行われています。

【歴史】河川でのウライ漁の禁止（北海道立文書館蔵 複製）

【しごと】漁撈の装い

【世界】モニター／アシリチェプノミ

映像を見てみよう！



サケを食べる

捕ったサケは寒干しや燻製にして保存するほか、串に刺して焼いたり、オハウ（汁もの）やチタタプ（たたき）にして食べます。すじこは、つぶしてラタシケプ（混ぜ煮）に加えたり、シト（団子）にかけたりして食べます。

【探究展示 テンパテンパ】サケの料理

映像を見てみよう！

【くらし】モニター／シト（団子）

【探究展示 テンパテンパ】チェプオハウ

サケを身に着ける

サケやイトウなどの魚の皮をはぎ合わせて、チェプウル（魚皮衣）を作ることができます。1着作るのに、およそ50枚～60枚のサケの皮が使われました。
チェプケレ（魚皮靴）は、主に冬に雪の中を歩くときに使いました。靴底に背びれがあり、滑り止めになっています。中には枯草などを入れて、足が凍えないようにしました。

【探究展示 テンパテンパ】チェプウル

【探究展示 テンパテンパ】チェプケレ

皆さんもぜひ、基本展示室で関心のあるテーマやモノを探してみましょう！

※基本展示室は定期的に展示替えを行っているため、ここで紹介した資料が展示されていない場合があります。

当館の研究プロジェクトを中心とした研究成果を紹介します

調査研究最前線 11

The forefront of investigation and research

Report

ICOM ICME学会2024年大会の報告

新旧と記憶の伝達　シンガポールと日本の地域博物館の事例研究

Transmission of the New, the Old, and Memory: Case Studies from Community Museums in Singapore and Japan

場所：メキシコ国立人類学博物館（メキシコ市）

2024年9月、国際博物館会議（ICOM）の民族学博物館・コレクション国際委員会（ICME）年大会がメキシコ国立人類学博物館で開催されました。2024年大会のテーマは「博物館と変化」です。世界20カ国・地域から約100名の博物館関係者が集まり、博物館の役割やその変化について、活発な議論が行われました。国立アイヌ民族博物館（以後、当館）からも劉研究員が「Transmission of the New, the Old, and Memory: Case Studies from Community Museums in Singapore and Japan」（日本語タイトル：新旧と記憶の伝達 シンガポールと日本の地域博物館の事例研究）というタイトルで発表を行いました。

大会のパネル発表の様子（左から3番目：劉研究員）

ICOMの大会でウポポイを紹介しました

この発表は、当館の研究プロジェクトである「民族学博物館におけるマルチメディアコミュニケーションの可能性」に関連した内容をまとめたものです。このごろの博物館は、物理的な展示スペースに限らず、デジタル技術を活用することで、オンラインやバーチャル空間でも文化を伝える役割が求められています。訪問者が文化に触れ、体験し、他者とのつながりを感じることは、文化的理解を深めるためにますます重要な要素となっています。

民族学をテーマとする博物館において、どのようにマルチメディアコミュニケーションを活用できるのか、そしてどの手法が最も効果的であるのかが本研究の主題です。発表では、当館の事例を紹介しながら、アジアにおける小規模なコミュニティ博物館を対象に、日本とシンガポールの2つの事例を取り上げました。シンガポールの華僑センターでは、インタラクティブなリストバンドや視覚的補助ツールを活用し、質問と答えの形で、訪問者が文化的儀式や言語、習慣に触れることで、多文化社会における自身のアイデンティティを再確認し、集合的記憶を形成するアプローチが導入されています。このような先進的な技術を通じた没入型体験は、訪問者が自らの文化的ルーツや多様性に対する認識を深めるために有効です。

シンガポール華僑センターのリストバンド

一方で、日本の札幌映像機材博物館では、逆に昭和時代までの映像機材を展示し、現代ではほとんど使われていない媒体を通じて過去の物語を伝えています。特に、Z世代に属する若者たちにとっては、親世代からの話や写真アルバムでしか知らない物品に実際に触れることで、記憶を継続させることができるという、魅力的な体験となっています。

札幌映像機材博物館の解説の様子

博物館は「記憶」と「共感」を呼び起こし、地域社会と博物館、そして訪問者との重要なつながりを探求しています。アイヌ文化は長らく口承や物理的資料を通じて伝承されてきましたが、デジタル技術を用いた展示は、来館者がアイヌ文化に対する深い理解と共感を得るための新たな手段として大きな可能性を秘めています。しかし、最も先進的な技術が常に最も効果的であるとは限りません。展示の目的に応じて適切な技術を選び、伝統的な手法と新しい技術を慎重に組み合わせることが、今後の博物館における記憶伝承の未来において重要な課題となるでしょう。

※本研究発表は「調査研究プロジェクト・学会発表（2024C03）」の支援を受けたものです。

（研究員　劉高力）

国立アイヌ民族博物館の収蔵、展示資料をピックアップして紹介します。

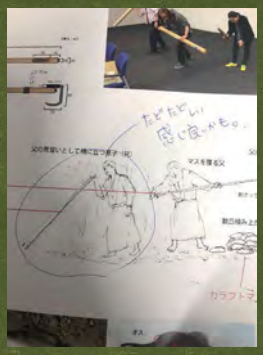
博物館Pickup!

ジオラマ展示

ピスン ウレシパ 海辺のくらし／キムン ウレシパ 山のくらし
（イケレウシ「テンパテンパ」探究展示 テンパテンパ t.1／t.2エリア）

博物館の基本展示のひとつ、「探究展示 テンパテンパ」には2つのジオラマがあります。820mm平方の小ぶりなジオラマですが、当館のなかでは唯一となるジオラマの展示です。これらのジオラマは、のぞき板のツールを使うことで、当時の人びとがどのようなくらしをしていたかを見つけることができます（本誌vol.4、p.4参照）。「海辺のくらし」では樺太オホーツク海沿岸の「落帆」（おちほ、アイヌ語地名・オチョポㇰカ、現・レスノエ）の河口周辺地域を、「山のくらし」では北海道の日高地方、平取町本町義経神社周辺を設定元として、ジオラマの考証が行われました。どちらのジオラマも1900年代初頭の、夏から秋にさしかかる、サケ・マス、野生の植物や畑の作物の収穫時期をモチーフとしています。2つのジオラマを見比べることで、同時代、同時期において地域によって異なる部分と同じ部分があることを見つけられるようになっています。例えば漁の場面では、北海道が設定元の「山のくらし」では、当時明治政府によりサケ漁が禁止されていたことを鑑み、草むらに隠れて漁をしているのに対して、樺太地域の「海辺のくらし」ではロシア帝国領時代で禁止されることなく漁を進めている様子が見て取れます。同様に、家屋のつくり、植生、犬や犬ぞりとの関わり、などの情報も含まれています。

実は各ジオラマの中に住んでいる人びとは、住む家、年代と家族構成、服装、持ち物、どこで何をしているかという部分まで、それぞれ設定がなされています。実際には10mmほどのフィギュアとなっている人びとですが、着物、鉢巻、前掛け、手荷物道具など細部まで再現を試みています。また、周囲の引き出しには、参考資料となった当時の風景の写真と、ほぼ同じ地域と推察される2000年以降の現地の写真を並べて展示しています。


フィギュア表現への指示図

このような伝統的なコタン（集落）でのくらしの様子は、21世紀の現在では実際に観ることはできませんが、展示を体験するかたがたに、当時あったであろうくらしの様子を想起していただくきっかけとして、そしてジオラマの周囲にあるテーマ展示をより深く体験いただくことを目指しています。ぜひジオラマの中のコタンに住む人びとのくらしを、近くでじっくりご覧になってください。

「海辺のくらし」のジオラマ設計図（2019年）

ジオラマ「山のくらし」（2021年撮影）

ジオラマの一風景：「アットゥシを織る」

ジオラマと共に展示されている写真：「落帆川の上流の方向」（2005年撮影）

（文：室長補佐　笹木一義／ジオラマコンセプト考証：資料情報室長　田村将人）

見て見て！園内サイン

ウポポイの園内サインをご紹介し、皆さまにより広くアイヌ語を知っていただくコーナーです！

6 ウアイヌコㇺ コタン 民族共生象徴空間

「民族共生象徴空間」はウポポイという愛称がよく知られていますが、アイヌ語の正式名称もあります。それが、ウアイヌコㇺ コタンです。ウアイヌコㇺは「敬いあう」、コタンは「集落」という意味です。

「民族共生象徴空間」はアイヌ文化を振興するための空間や施設であるのはもちろん、アイヌ文化の復興・創造等の拠点として、また、将来に向けて先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴として位置づけられています。そこで、民族共生のためには、お互いに敬いあうことが重要であるとの思いから、ウアイヌコㇺという言葉が使われています。

静内（現在の新ひだか町）地方の物語※で、フクロウのカムイ（いわゆる神）が、飢饉をおこしてしまったシカを司るカムイと魚を司るカムイを懲らしめる物語があります。その中の「人間の心がけがよくて神を敬ってくれると　こうして私たちもお互い敬えるのだよ」とフクロウのカムイが語る一節などを参考にしました。　（研究主査　中井貴規）

園内マップにおけるウアイヌコㇺ コタンの表示

※北海道静内町教育委員会編『静内地方の伝承V　織田ステノの口承文芸（5）』pp.105-132「カムイユカㇲ4」（1995年、静内町郷土史研究会）

当財団としては、「レイシャル・ハラスメントは許さない」との信念のもと、レイシャル・ハラスメントに当たる行為に対して毅然として対応する姿勢を『ウアイヌコㇺ宣言』として表明するとともに、職員の知識や健康の増進と安全・安心な就業環境を確保するため、各種の取組を進めることとしました。〈令和6年6月6日 プレスリリース資料より〉

レイシャル・ハラスメント対策『ウアイヌコㇺ宣言』　https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/details/post_15.html

国立アイヌ民族博物館からのお知らせ

国立アイヌ民族博物館第８回テーマ展示「ウイマムレプンカ　サンタン交易と蝦夷錦」

【会期】2025年3月15日㈯～2025年5月18日㈰　【主催】国立アイヌ民族博物館　【開催協力】市立函館博物館

北海道や樺太（サハリン）、ロシア極東地域の先住民族は、17～19世紀にかけてサンタン交易と呼ばれるネットワークを通じてさまざまなモノを流通させ、その交易ルートは「北東アジアのシルクロード」とも呼ばれています。このネットワークを通じてもたらされた代表的なものが、中国の官服である蝦夷錦・サンタン服やその反物です。本展示では、その蝦夷錦・サンタン服を中心に、ガラス玉や銭貨など、アイヌ文化にもたらされた中国製品と他の先住民族との交流についてご紹介します。
なお、市立函館博物館令和6年度企画展「北東アジアのシルクロード－北方交易と蝦夷錦－」（終了）で展示された資料もお借りします。市立函館博物館との共催シンポジウム「北方先住民族の交易と産物」（2024年8月17日：函館市中央図書館）では、瀧本壽史氏、相原秀起氏、佐々木史郎館長によって研究の成果が披露されました。

蝦夷錦／市立函館博物館蔵

8/17共催シンポジウムの様子

日本生態学会第72回大会 一般公開講演会「人と野生動物の共存―せめぎ合いの歴史から考える」開催のお知らせ

北海道の自然と共に生きてきたアイヌの人々は、野生動物とどのように向き合い、共存してきたのでしょうか。文化庁アイヌ文化振興調査官の内田祐一氏が、演者の一人として歴史的な視点から現代の課題まで、分かりやすくお話しします。
本講演会は、単なる野生動物の個体数管理や被害対策の話にとどまらず、私たちが将来にわたって野生動物と共存するために何が必要かを、生態学の研究者と共に考える機会となります。
※本講演会は日本生態学会第72回大会の一環として開催されます。一般の方の参加を歓迎いたします。

◆日時／2025年3月15日㈯　参加費無料
※具体的な講演時間、参加・申込方法等は日本生態学会第72回大会のホームページ（https://esj-meeting.net/home_ja/）でご確認ください。
◆場所／札幌コンベンションセンター　特別会議場
◆講師／内田祐一氏（文化庁アイヌ文化振興調査官）
◆講演内容／・アイヌの人々の伝統的な野生動物との関わり方
・交易の変遷に伴う人と動物の関係性の変化
・現代における「野生動物との共生」の意味を考える

ウポポイってこんなとこ15

ウポポイ ホワイトシーズンの風物詩

11月よりホワイトシーズンが始まりました。園内には冬にしか見られないものがあることをご存じですか？ グリーンシーズンとは一味違ったウポポイへぜひお越しください♪
※公開時期は随時ウポポイウェブサイトなどでご案内します。

クチャ（狩小屋）

クチャは、狩りなどの目的で野山に入った時に、風雪を避けて寝泊りや煮炊きするために建てられる簡易的な小屋です。
クチャの材料は、野山にある木の枝や草の葉など現地で手に入るものを使います。

クチャの建て方の様子をちょこっとご紹介します！

1 3本の棒と紐を使い三脚を立てます。

2 そこへ7本程度の棒を立てかけて骨組みをつくります。

3 トドマツなどの枝葉をかぶせていきます。

4 完成！

サッチェプ（干し魚）

魚を干して乾燥させて作るサッチェプは、主に保存用として加工します。サケやスケソウダラをはじめ、ヤマメやウグイなどの小魚も乾燥させて保存します。乾燥保存した魚は、水に浸して戻しオハウ（汁もの）の具材や出汁として使われるほか、煮たり焼いたりして食べることもあります。

ウポポイで作るサッチェプは、3カ月ほど屋外で寒干しをしてから、チセ（家屋）の中の囲炉裏の煙で2カ月ほどかけてゆっくりと燻製にします。

完成後は、ヤイハノッカラチセ（体験学習館）で行われる食に関する体験プログラムなどで使います。
※写真は「オハウ試食体験」です。

NATIONAL AINU MUSEUM
国立アイヌ民族博物館
https://nam.go.jp/

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

■お問い合わせ
公益財団法人 アイヌ民族文化財団（ウポポイ内）
住　所：〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町2丁目3番2号
電　話：0144-82-3914　FAX：0144-82-3685
メール：info@ainu-upopoy.jp

プログラム等の詳しい情報はウポポイウェブサイトをご覧ください。
ウポポイ　検索
https://ainu-upopoy.jp/

※アヌアヌは、アイヌ語で「もしもし」の意味です

国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」第18号　編集・発行：国立アイヌ民族博物館　2024年12月発行　印刷：TOPPAN株式会社　ISSN 2435-8207